



応募期間
2026.2.1 ▶ 2026.3.22

企画主催：一般社団法人大島観光協会
審査員：北山輝泰（写真家兼ビデオグラファー）
後援：東京都、東京都星景大島町、東海汽船株式会社、東京新聞、全東京写真連盟



たくさんのご応募ありがとうございました。
総応募数138作品の中から
厳正なる審査の結果、
最優秀賞1点・優秀賞2点・
入選10点が
選ばれました。
おめでとうございます。



最優秀賞（1作品）

「夜明けの波浮港」
岩崎 稔友紀さま

<選評>

夜から朝へと移り変わる、わずかな時間を見事にとらえた作品です。空は深い青からやわらかなオレンジへとグラデーションを描き、その下で波浮港の灯りが静かに水面へと溶け込んでいきます。印象的なのは、人工の光と自然の光が絶妙なバランスで共存している点。港の温かな灯りが長く伸びる水面の反射となり、まだ眠りの残る島の空気感をより一層引き立てています。静けさの中に確かな生活の気配が感じられ、伊豆大島の朝の魅力を丁寧に写し取った一枚。時間と光を味方につけた、完成度の高い作品です。

優秀賞（2作品）

「鐘景」小原隆哉さま



野田浜のバディーズ・ベルを円形のフレームとして捉え、その中に夕陽を収めた構図が印象的です。対岸に望む伊豆半島のシルエットとともに、夕景の美しさが丁寧に描かれています。そこに並ぶ人々の姿が加わることで、この場所で同じ時間を過ごすひとときの共有が感じられ、風景に温もりが生まれています。静かな余韻とともに、その場の空気感まで伝わってくる一枚です。



手のひらにそっと集められた椿の花。そのやわらかな仕草と、赤い花びらの鮮やかさが美しく印象に残ります。落ちた花を拾い上げるその仕草そのものが、穏やかなひとときとして印象に残ります。背景を大きくぼかすことで主題が際立ち、光の当たり方も相まって、花と手の質感が丁寧に描かれています。何気ない瞬間を大切に切り取った、温もりのある一枚です。

「拾い椿」 TATSUYAさま

入選（10作品）



「椿の季節を抱きしめて」
生方知世さま

あんこの衣装を身につけた子どもたちの表情がとても生き生きとしており、見る人の心を和ませます。低いアングルから見上げる形で切り取った非日常的な構図が、作品に面白さを与えています。



「大地の息吹」
江口風舞輝さま

三原山から立ちのぼる噴煙と斜光が織りなす陰影が美しく、荒々しい自然の息づかいを感じさせます。余白を活かした構図が印象的で、静けさと迫力を同時に表現しています。



「椿も笑顔も満開！」
南秀人さま

紅白のコントラストが鮮やかで、椿の花の存在感が際立つ一枚です。暗い背景によって主題が引き締まり、光の当たり方も相まって立体感のある表現に仕上がっています。



「椿まつり」
西躰舞さま

鮮やかな緑の衣装をまとったあんこさんたちの隊列が印象的で、揃った動きから心地よいリズムが伝わってきます。道路に落ちる影も画面に奥行きと流れを与え、行進の雰囲気をもより豊かに表現しています。



「バウムクーヘン
食べに来た！」
佐野真理さま

地層の力強いラインと人物の対比が印象的で、自然のスケール感がよく伝わってきます。シンプルな配置ながら視線の流れが明快で、被写体同士の関係性がうまく表現されています。



「宇宙（そら）の
深呼吸」
ひとみさま

沈む天の川と月の光が印象的な作品です。地平線まで星がしっかり写る様子は、伊豆大島の夜空の暗さと星空の美しさを表しています。



「三原山を背負って進む」
小佐野航二さま

神輿を中心に人々の熱気が画面いっぱいに広がり、祭りの高揚感がストレートに伝わってきます。中央にしっかりと据えられた神輿に視線が自然と集まり、周囲の人々の動きや表情が、その盛り上がりを一層引き立てています。



「散り椿とヒヨドリ」
秋本日向さま

顔まで花粉で黄色くなったヒヨドリの姿が印象的です。背景の整理もよく、色のバランスが美しいことで、主役が埋もれずにしっかりと引き立っています。



「椿ランプ」
水島航さま

透過光に照らされた椿の花の繊細な質感が美しく、やわらかな光の扱いが印象的です。シンプルな構図ながら、光と色で見せる完成度の高い作品に仕上がっています。



「祝福」

島田 淳さま

雲間から差し込む光が海面を照らし、ドラマチックな空気感を生み出しています。漁港、海、空と雲というシンプルな構図ですが、光が作り出す一瞬の風景を美しく切り取った一枚です。